

ヒラメ漁獲量の動向と稚魚の出現状況

1. 2022年のヒラメの漁獲状況

茨城県におけるヒラメの漁獲量は2011年以降増加傾向でしたが、2015年の597トンピークに減少傾向に転じ、2022年は183トンとなりました。2021年と比較するとやや増加しましたが、漁獲量は震災前と同程度の200トン前後で推移しています(図1)。

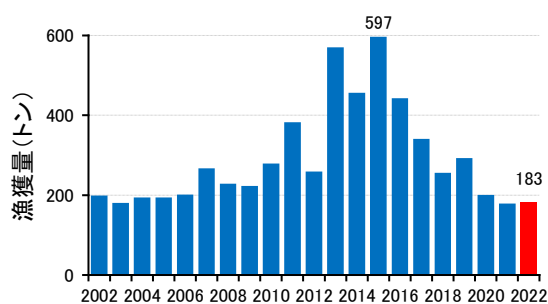


図1. 過去20年の茨城県のヒラメ漁獲量の推移(1~12月、属地集計)。

2. 2022年生まれの稚魚の出現状況

水産資源の動向は、漁獲状況に加えて、産卵量や仔稚魚の生き残りに関わる環境条件等が影響します。当場では4~12月に月1回、鉾田市玉田沖(距岸0.25~2.0マイル、水深約6~20m)で、その年に生まれた稚魚の分布密度を調査しています。今年生まれの稚魚は1年後には約30cmに成長し、漁獲されるようになります。

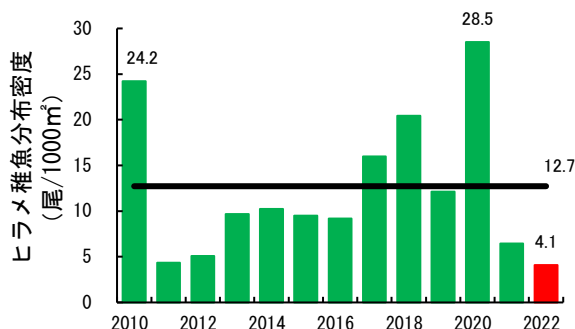


図2. 玉田沖におけるヒラメ稚魚の最大分布密度の経年推移。横線は過去10年の最大分布密度の平均値を示す。

2022年における稚魚の最大分布密度は4.1尾/1,000m²で過去10年の最大分布密度の平均値(12.7尾)を下回りました(図2)。ヒラメ稚魚の分布密度は低い結果となりましたが、一方で他種の稚魚が多く採集されました。ヒラメ稚魚の出現状況と漁獲量の関係については、餌の競合等他種の稚魚との関係も踏まえ、研究を進める必要があると考えています。

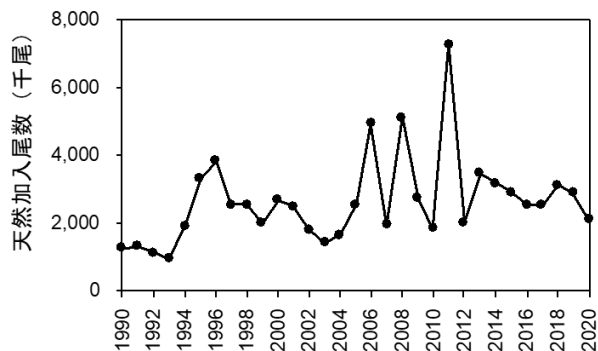


図3. 太平洋北部系群における1990~2020年の天然加入尾数(1歳魚)の推移。

また、本県のヒラメが属する「ヒラメ太平洋北部系群」は、2010年に卓越年級群が発生し、2011年に1歳魚が大量加入して以降、卓越年級群は発生していません※1(図3)。

一方で、本県の2020年の稚魚の最大分布密度(28.5尾/1,000m²)は、太平洋北部系群が卓越年級群であった2010年の最大分布密度(24.2尾/1,000m²)を上回っていました。

2010年の卓越年級群は2年後以降に漁獲加入し、漁獲量の増加に貢献していたことから、今後の2020年級群の漁獲加入状況に着目していきます。

(定着性資源部 水谷宏太)

※1 富樫博幸、成松庸二、鈴木勇人、森川英祐、時岡 駿、三澤 遼、金森由妃、永尾次郎、櫻井慎大(2022) 令和3(2021)年度ヒラメ太平洋北部系群の資源評価。我が国周辺水域の漁業資源評価。水産庁・水産研究・教育機構, 43pp, <http://www.abchan.fra.go.jp/digests2021/index.html>